

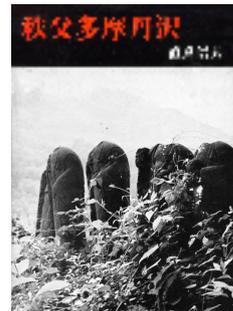
平成 21 年度 秦野市立桜土手古墳展示館 特別展

秦野に眠るナチュラリスト 直良信夫展

会期：平成 21 年 11 月 1 日から 22 年 1 月 11 日



直良信夫（1902—1985）



はじめに

「直良信夫」の名は、一定以上の年齢の方には「明石原人」発見者として、歴史の教科書でなじみが深いこととされます。しかし、直良の業績はそれだけにとどまるものではありません。考古学、生物学、生態学など、その研究対象は幅広く、随筆なども含め、生涯に 60 冊以上の著書を刊行しています。

様々な動物を飼い、植物を育て、歴史のいぶきをもとめて古道や峠を歩い

た直良の文章には、自然や生命といったものに対する限りない愛着を看取することができます。

直良は昭和 30 年代から秦野の地をしばしば訪れ、その時々記録は報告書や随筆の形でまとめられており、秦野市における文化財調査研究の先駆的業績に位置づけられます。また、その墓所は市内今泉の太岳院にあり、市にとってもゆかりの深い人物といえるでしょう。

直良信夫の生涯

直良信夫は旧姓を村本といい、明治35年1月に大分県北海部郡臼杵(うすき)町大字二王座に生まれました。

大正3年、尋常小学校高等科1年を終了すると、伯母の養子となり上京、王子尋常小学校高等科2年に編入学しますが高等科2年終了と同時に臼杵に帰ってしまいます。その後、2年ほど独学する日々を送るうち、女学校の教師であった直良音(おと)と知り合います。

大正6年、再び上京すると、昼は鉄道院上野保線事務所の給仕として働き、夜は早稲田工手学校夜間部に入学して勉学に励む生活を始めましたが、体を壊し、学校のほうは退学せざるを得ませんでした。そして翌年、健康を取り戻すと、今度は岩倉鉄道学校に入学します。

大正9年3月、鉄道学校を卒業した村本信夫は、中目黒にあった農商務省所管の臨時窒素研究所に就職します。



臨時窒素研究所内部の様子

休暇を利用して目黒周辺の貝塚や遺跡の踏査・発掘を行っていた村本は、採集した土器片を乳鉢ですりつぶし、化学的に分析する研究に着手しました。こ

れは当時、誰も試みたことがないユニークな研究で、その成果は大正12年夏「目黒の上高地に於ける人類遺跡及文化の化学的考察」と題して、雑誌『社会史研究』に掲載されます。

しかし、再び体調は悪化し、結核と診断された村本は研究所を辞め、郷里で静養すべく、大正12年8月31日、夜汽車で東京を離れました。

車中で村本は、姫路の女学校に転勤していた直良音を訪ねてみようと思立ちます。音に再会すると、姫路での静養を勧められました。大正13年には村本が入籍する形で音と結婚、直良姓を名乗ることとなります。翌年には療養に適した明石に移住し、療養の傍ら考古学研究に没頭する生活が始まりました。

昭和6年4月18日、直良は兵庫県明石の西八木海岸で、崩れた崖の土の中から化石化した人間の腰骨を発見します。この人骨化石を含んでいた土は、ナウマン象の化石などを含む層の土と同じものであり、ナウマン象と同じ時代に生きていた旧石器時代人類の骨ということになります。直良はかつて、この海岸で旧石器時代の石器と思われるものを採集しており、その報告を『人類学雑誌』に投稿したばかりでした。

しかし当時、考古学者は古式の縄紋土器を捜している段階で、日本に旧石器時代人類が生息していたという話にはわかには受入れられませんでした。

直良は人骨化石を鑑定してもらうため、東京大学人類学教室の松村瞭に送ります。当初は積極的に評価する態度を示した松村でしたが、やがて「適当な比較

材料がないためなんともいえない」という意味の手紙とともに人骨化石が返送されてきました。松村の態度が急変した背景には、当時の学界の複雑な人間関係があったといえます。こうして石器についての論文は黙殺され、腰骨は自殺者のものか墓地から落ちてきたものだとささやかれたりもしました。しかし、松村は人骨化石を重要視してか、精巧な石膏型を作成していました。



明石西八木海岸で発見された人骨化石

直良は昭和7年11月に三たび上京すると、文通で教えを受けていた早稲田大学の徳永重康を訪ね、私設助手として獣骨化石の整理作業を行なうことを依頼されます。こうして直良は、古生物学や動物学への興味と知識を深め、昭和十年代には、遺跡出土の自然遺物の同定、分析者としての立場を確立します。

徳永は直良を無給で従事させることに気を遣い、早稲田大学理工学部採鉱冶金学教室の図書係の職を紹介しました。昭和15年に徳永が逝去すると、一旦は辞職しようとするのですが、大学側から引き止められ、研究室での仕事を

続けました。そして昭和19年、理工学部採鉱冶金学教室で古生物学を教えることとなり、翌20年4月には早稲田大学講師の肩書きで古生物学と地理学を教えることとなります。

昭和20年5月25日、東京大空襲で自宅が炎上、人骨化石をはじめ、書き溜めた原稿や膨大な資料は灰燼に帰してしまいました。

昭和22年、東京大学に残されていた人骨化石の石膏型を検討した長谷部言人(ことんど)が、数十万年前の北京原人級のものとして評価し、「ニッポナントロプス・アカシエンシス」と命名すると、直良の発見した化石人骨は「明石原人」の名で広く知られるようになりました。

直良は、こののちも「葛生原人」や「江古田植物化石層中の野性稲」などの発見を行ない、昭和32年7月には『日本古代農業発達史』により早稲田大学から文学博士の学位を受け、昭和35年4月には理工学部教授に就任します。

昭和40年5月、戦後長く病気がちであった音夫人が亡くなると、翌年12月音の従姉妹である春江と再婚します。昭和47年には早稲田大学を定年退職しますが、睡眠不足がひどくなっており、東京の喧騒から脱出することを決意し、春江の故郷の出雲に転居します。

昭和57年、「明石原人」をめぐる論争が再熱し、昭和60年には、国立歴史民俗博物館による西八木海岸の発掘調査が行われますが、その時すでに直良は病床にありました。そして11月2日、明石市文化功労章を贈られた翌日、83歳の生涯を閉じたのでした。



西八木海岸の「明石原人」腰骨発見地の看板

秦野とのかかわり

昭和 32 年、郷土史家の梅澤英三が秦野市内に残されていたニホンオオカミの頭骨3点を東京科学博物館に持ち込み、動物学者の間で話題となりました。この資料の計測のため、直良は秦野の地を訪れました。



市内に残るニホンオオカミ頭骨

梅澤は翌年に秦野文化協会(後に秦野郷土文化会と改称)を立ち上げ、直良は同会とのつながりで、たびたび秦野周

辺に足を運ぶようになりました。

昭和 39 年 5 月 15 日から 26 日には東中学校の校庭拡張工事に伴う発掘調査が行なわれており、この発掘調査の調査団長も引き受けています。

昭和 46 年には古式を再現して行なわれた今泉地区の道祖神祭りを見学に訪れ、この時の様子を翌年、雑誌『アルプ』に「秦野の冬」と題して発表しました。

直良は秦野の地が気に入って、昭和 40 年に音夫人が亡くなると墓所を今泉の太岳院に求めました。早稲田大学を退職した時、東京からの転居先として考えたこともあったそうです。

昭和 60 年 11 月 2 日、83 歳の生涯を終えた直良の遺骨は同月 8 日、秦野市今泉の太岳院の墓所に納骨されました。戒名は「秋成院洪化清信居士」。ひととき大きな五輪塔です。



今泉太岳院の直良家墓所

秦野に眠るナチュラルリスト 直良信夫展
発行 平成 21 年 11 月 1 日
編集 秦野市立桜土手古墳展示館

〒259-1304 神奈川県秦野市 380-3
Tel. 0463-87-5542
FAX 0463-87-5794